

父子関西旅行に関する三氏の記述

	佐藤隆房『宮沢賢治』 ¹⁾	小倉豊文「旅に於ける賢治」等	堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』 ⁹⁾
二見から大津・坂本	二見を発ち、草津で乗り換え、昼頃大津駅に下車し、琵琶湖を坂本通いの乗合汽船に乗りました。船中で食事をし、船は二時間ほどかかったようで、午後一時頃坂本に着きました。	宿で朝飯をすませた二人は、二見駅から京都行の列車に乗った。草津線経由である。そして大津駅に下車した。当時の大津駅は現在のそれよりもずっと東寄り、現在の膳所駅のところにあつた。既に陽は午後にまわつてゐる。二人は急いで琵琶湖沿岸に出て石場浜から湖南汽船に乗った。	第三日は二見駅より乗車。大津の石場浜から湖南汽船にのり下坂本下船。
比叡登山	この日のうちに、京都に入る予定であつたのに昼を過ぎたことでもあり、幸いに坂本からはそんな坂も険しくなかつたので、急いで登りました。 根本中堂下の坂は、余り長くはなかつたが、そこの坂だけはかなりの急坂だったので、二人は春の汗を額にしながらか午後三時頃根本中堂に着きました。	「旅に於ける賢治」 ²⁾ 下坂本で船を降りた二人は爪先登りの田舎道を上坂本の比叡登山口に急いだ。そして、日吉神社に参る暇もなく登り三十五町の山路にかゝつた。(中略) みづうみは夢の中なる碧孔雀 まひるながらに寂しかりけり 賢治のこの一首も、この道々の囁目詠であらう。 「傳教大師 比叡山 宮澤賢治」 ³⁾ 父子二人は日吉神社に参詣もせずになぐ登山路にかゝつた。恐らくこの登山路での琵琶湖遠望から得たらしい歌に次の一首がある。 みづうみは…(以下略) (中略)そして、歌集ではこの六首の次に前にあげた「みづうみは…」の一首があるのであるが、講堂参拝の頃はすでに陽が西に傾いた頃であつて「まひる」ではなかつた。父政次郎翁の直話でも湖をながめて立ち留つたのは登山途上であつたとのこと、従つて私は前述の如く解しているのである。	これより比叡山徒歩約四キロを登る。
根本中堂・大講堂	賢治さんは、花崗岩の腐蝕した白とごまとの砂地の庭を清浄に思い、大変なつかしみました。根本中堂に参じ大講堂を拝しました。	「旅に於ける賢治」 ²⁾ 木の間がくりに聳える文殊楼をくゞる石磴を上り下りすると、ひっそりとした山の窪地にしづもる大伽藍が眼前にあらわれる。即ち根本中堂であつて(中略)。この根本中堂の窪地から上つて更に一町ばかり進むと大講堂がある。こゝでは前述した如く、この年四月四日まで大師一千一百年遠忌が厳修されたばかりであつた。 「傳教大師 比叡山 宮澤賢治」 ³⁾ 山上について先づ参つたのが根本中堂。文殊楼は気がつかずに通りすぎてしまったらしい。土地不案内の初旅であり、先を急いでもいたのだから無理もなかつたであらう。	根本中堂で合掌(現在この近くに賢治の歌碑が建っている)。それより進んで大講堂へ。開祖伝教大師大遠忌の五色の幡が堂を飾っている。
大乘院	(言及なし)	彼等は大講堂から名残を惜しみつゝ歩をかえした。そして、道を大乘院「親鸞上人蕎麦喰木像」にとつた。	(言及なし)
比叡下山	帰途は裏に回って白河路を行くこととなりました。この道も京の方から来た巡礼姿の巡拝の女人に会つたほかは、誰にも会わず、淋しい道でした。山を下る頃、すでに黄昏になりました。(中略)水音のみの真つ暗い大原の町を過ぎ、京の出町柳から市電に乗って疲れた身体を三条小橋の布袋屋に投じました。	彼らは「白河越」の道を京都を目ざしてひたいそぎにいそいだ。(中略)根本中堂から大乘院、七曲がりの嶮を経、地藏谷から銀閣寺の裏手の白川村の降り口まで一里三十余町ある。(中略)白川の里に出た二人はその後宵の京洛をどう歩いたかわからない。とにかくその夜は三条橋畔に宿をとつた。	しだいに暮れてくるので山を下る。京の町へ約八キロ。三条小橋際の旅館に泊る。

中外日報社	次の日の朝も早く宿を立ち、三十三間堂の近くにあった中外日報社を訪ねて行きました。それは聖徳太子の磯長の廟に行く道をたずねるためでした。	第四日目、朝、三条の宿を出た二人は、七条大橋東詰下つたところの中外日報社を訪ねた。父がこの新聞の愛読者であつたことは前に記したが、訪問の目的は大阪府磯長叡福寺即ち聖徳太子の墓所への道を尋ねる為であつた。だから、社の玄関で社員にそれを教えられると、そのまま京都駅に向つたのである。	第四日、父愛読の中外日報社へいき磯長村叡福寺への交通をきき(後略)
叡福寺参詣中止の経緯	(中外日報社で)高野に行く線に乗ればよいと教えてもらったのですが、結局分かりにくい所なので方針を変え、奈良線に乗って奈良に向かいました。	<p>「旅に於ける賢治」²⁾ 大阪市も全く素通りで、梅田の大阪駅から関西線始発駅の湊町へいそいだ。ところが当時磯長に行くのには関西線柏原駅に下車して大阪鉄道に乗り換え、更にもう一度道明寺で乗り換えて太子口喜志に下車、それから約一里を徒歩しなければならぬ。慣れぬ旅人には相当面倒である。そこで二人は柏原途中下車を中止してそのまま法隆寺駅まで乗ってしまった。そしてそこで下車して法隆寺に参詣することにしたのである。「同じ太子の遺蹟であれば…」との下心であつたらしい。</p> <p>『「雨ニモマケズ手帳」新考』⁴⁾ 最後に前述の京都から法隆寺へ行くのに大阪を廻った異様な行程について記しておく。この旅行の父の計画については前述したが、聖徳太子の聖蹟では先ず河内の叡福寺の墓参りを予定していた。そこで京都に着くと年来愛読していた「中外日報」社に立寄って道筋を教わり、大阪に出て関西線に乗り、柏原駅で大阪鉄道河内長野行の電車に乗り換え、太子口喜志駅に下車して徒歩参詣する心算だったのである。ところが柏原駅を乗り過ぎてしまった。そこで叡福寺を法隆寺に振りかえたのだとのこと。「帝国文庫」と共に政次郎から聴いた思い出の笑話の一つである。</p>	大阪へ出て汽車に乗ったが教え方がまづかったか、線がちがうのであきらめて奈良へ出、(後略)
奈良の宿泊	春日神社の入口近くにある旅宿に旅装を解きました。	雨雲と夕べの色におわれるように奈良駅に着いた二人は、三条通を急いで、興福寺門前の宿に入った。	興福寺門前の宿に泊る。
東京での別れ	次の朝、奈良を発って東京へ帰りました。賢治さんが父と長い旅をともにしたということは、後にも先にも、この時だけです。	ところで、この前後六日にわたる厳父のなさけの同行二人の関西巡礼も、賢治の初志をゆるがせて帰郷の決意をさせるには至らなかつた。この問題には父も触れず子も触れず、賢治は上野駅頭に丁寧な父を送つて別れたのである。「あんなことには並はずれて丁寧な男でございました」	第六日、午前、東京駅着。午後父を上野駅に見送る。

[出典]

- 1) 佐藤隆房: 宮沢賢治. 富山房. 東京, 1942
- 2) 小倉豊文: 旅に於ける賢治. 四次元 第三卷第二号, 1951
- 3) 小倉豊文: 傳教大師 比叡山 宮澤賢治. 比叡山 復刊第三十一号(通刊 256 号), 天台宗務庁, 1957
- 4) 小倉豊文: 『雨ニモマケズ手帳』新考. 東京創元社, 東京, 1978
- 5) 堀尾青史: 年譜 宮澤賢治伝. 中央公論社, 東京, 1991